

用捨箱
中

2137

三二八

享保の頃の書解今も同此句も竹串へ穿りたる辛皮を焚くは狐のひあり

二 高燈籠

昔々物語 新見 昔ハ 死去 其年より七月高燈籠といふ物と云ふ七
 回忌までたつものゆり立やうの六月晦日長さ五六間の杉丸をよ上之用のうらうを
 結杉の葉を包四手をきろて付燈籠の辻番の行燈の形ふちひさ作止ひさ
 下を竹まき屋根も板まきこりへ玄間と基所の間の廣さ建七月朔日より
 晦日まで毎夜六ツより明六ツまでをこりへ一向宗へ見え他宗をこかく
 如比古衣かたあり」とゆり是言享保十八年の記されしれハ既ハ當時在家の
 高燈籠の絶へるも明るまじらつの頃までありし歎知く考へ合さへ草紙の
 未見く師宣が画本小圖ゆり左小模ま

俳諧世男

杉葉木の又六ヶぬり 高燈籠 似春
 在家の燈籠と証しをたがふれ杉の葉を包とある合ま

画本月並の遊ひ



此画本が元禄の年号ありの後彫りれ也
 貞享元年の刻あり

頭書云 前文略

狂塗でささまの物とそり
 措置ちささまの光若さり火焚
 かけ佛名をささまのむらり
 辺き傾見しるの佛也
 三年のうちさ燈籠は
 たりさうろち
 見人の目乃
 うと火りあ



用捨箱中二

今も死亡者ある家史七月軒燈籠をかゝるハ此余彼あて高燈籠も三年お限の
風俗あり故七回忌までたつとも御堂と甘く物語あるとされ一ある燈
二用おのころを結四をさきりて付るると徳老人の記さき一此画よく合を
吉原玉屋山三郎が家あて新精靈あかえを海洋も燈籠をいす事今小籠在在
ハ事あつた彼家のとるんと三亭のり遊年ハ礪子あてよをい故る燈籠とらえわて

延宝年刻

富士石

郭公面影かへき高燈籠 調杓

金書録

吉原の灯をさひまむる燈籠 咫尺

延宝の夕一人のさふかきけ一在家の燈籠る享保の吟ハ山谷橋場とるの寺院
の燈籠るり同る燈籠の夕も時代ふりて見されけり意の解かき事あるべ

〔三〕杓の昔昔浦打

端午の日の印地打一交一ての人多切とる正保慶安の頃ハ此日專童のいご

ゆきそひ事 昔々物語かき。又其のんち切止昔昔浦打とるれど 中古風俗志
明和元年 享保の頃までの所ハ廣小路へ童集り昔昔浦史大なるかきこ打
老人筆記 享保の頃までの所ハ廣小路へ童集り昔昔浦史大なるかきこ打
の繩をとり或ハ長竿等を持出往來の子供あやめくといひて下座をさき若
下座をせされハ打かりとて使ふつとて小洞市ると重相をととされなく
近かへし事あて何ぞか今絶てり」との事あり。さて此昔昔浦うち絶する
後も吉原の杓ののり歩り彼前夕の日江戶町方京町方と立別れ待合の街
小出て打合を見物群集あてり一か何やまて瓶をかうり杓のり一とる
遂お止りとの事平道集あてり一か何やまて瓶をかうり杓のり一とる
さき平道役一と今のをむる小便なり考証不備ふき事ハ二ツ見出あり

上京祭 享保十年日記
参日月並集

端午 扱こせよ隠糸禿巻物や免 左十

用捨箱 中三

又寛延元年吉原細見さいけん里の家名記ヤナギの序まへ初午はつご九郎助くわの流仕舞ながしまい上巳じの京きやうの次郎つぎぢやう右衛門ゑもんの瓜うりのふ。五月五日ごごの禊けがれが昔むかし蒲かき滿みちうち。七月しちがつの銀紙ぎんしをかりふおしきの故ゆゑ所ところを彫う抜ぬて牽牛けんぎゆうの奉ほうり」といふ事ことをいふれが平道へいぢやうが説せつの如ごとくあるべし

因よ云い。あくあくく思おもふふ敵てきといふふ名な訓しん深ふかきあ容ようの事こと。是こゝより十年じゆんねんの後のち宝曆ほうりき七年しちねん七月しちがつ細見さいけんの標題たいぎと「紋もんつー」とよびも彼客かのきやくの故ゆゑをきりて七なな夕ゆふの奉ほうり事ことのゆゑゆゑ故ゆゑ也なり其その序しよ中ちゆう「扱あ又また夕ゆふ月げつ七日しちにちの夜思よしみふれて己おのれの定さだ見けん牽けん牛ぎゆう織おり女むすめの奉ほうり木きの浮うけんを待まち宵よ名な月げつ」と記きして下したの摸もしうしう馬うまのり今いまもさる事ことありや不知しらず



四 紙帳賣 紙子賣

飛とち川がわ 昔むかし長なが近ちかくるられが紙帳賣しぢやうばい。冬ふゆふるらればてんとくト紙し衆しゆうといふ物を

商あきひらうら今いまのまくる上うへ卷ま記きをかく享保きやうほ出生しうしつの老人らうじんの筆ふで記きるれが元もと又また寛保かんぽの頃ころまでまで此こゝ商人あきの來きりる今いまのま見けん世せい棚たなの賣うりを其その家いへももあらずし

富士石 延宝七年刻

雨あめ暗くらて声こゑのやまら紙帳賣しぢやうばい 宗也

向之圖 延宝八年刻

夕ゆふ立たやゆらが中なかつの紙帳賣しぢやうばい 立澤

二本ふたぽんも江戸えどの集あひまり延宝えんぽの頃ころの專賣せんばい來きり証あかしといふは被かてんといふは紙し衆しゆうの紙衣賣しえいばいが持もつり紙衣賣しえいばいの京師きやうしの俳諧集はいかいしゆ中ちゆうも見けんえり左ひだりの録ろくま

誘心集 寛文十三年刻 種寛撰

冬ふゆ雜ざつ 引ひあらばや紅べに茶ちやの錦紙衣賣にしんしえいばい 千之

隱業 延宝五

時るる哉紙衣うる声初時雨 重政

夕紅 元禄十年刻

仙臺の浄溜橋夢ん紙子賣 花歌

此夕紅のこゝ富士石と同調和撰あて江戸の集るるされ紙衣賣の何國おも
ゆきし事必せり昔の下人の紙帳と釣紙衣と着者かなくり質素のさき紙
是を思ひやるへー仙臺浄溜橋の事ハ下の巻ふゆり照ゆをそ見るのへー

五 金銀を加羅といふ隠語

昔の俳諧の狂言も過二佛の間といひけり釋迦を鎗持おとす類今のといひ
さまと異なる談林の俳諧調あるやけいおもむきゆりて後世のやえ雅あり

空林風葉 自悦撰 天和三年刻

笑ひ顔加藤とともや若夷 季好

月六
小六
野

年若き遊女をあるもあし詰るんどのいふあり若夷を遊女おのりあり是彼
釋迦を澁りちとまるの類ならんさて句意は花街の隠語小金銀の事を
加藤といふそれをゆりんやとそ笑顔をつる鉄といふさるる吉原のいふ

かたらのま

金太夫

京町
孫五郎内

あかへんといく男の金銀もいけりや不気味
金太夫のこ男も金銀もいけりや不気味
やぐしといふ時伽羅あて事をとるやうり伽羅
かたらのまといひ男のやとといひ月ハ伽羅か
くらなといひのまらといひやうといひあて
あるもいハ伽羅の代て金銀はくはて又力とい
るれどもやらといひやうといひ金銀のといひ

伽羅卷 蓮花文

竹本藏書



金銀を伽羅きんぎょといひ語釋ごあやくと見えたりけまじり治二年の印本なれを此際このとき語いとうことば空林風葉くうりんふうえつハ京師きやうしの集あつめられたつの花街はなまち史しものひさるるはな箱はこ一

吉原譚嘲記きよはらだんちやうき寛文七くわんぶんしち年印本ニ浦屋内うらやないせきまをを遊女あそびめと評ひやうする詞ことばハある人の曰いわけ

人を炭園すすの園といひ色の黒くろきぬ多おほくとりふ。其その言ことて曰いわさぬらゆるむむ君きみふあられぬ人ひと伽羅きよはらを焼やきくまくまと心こころる人ひととゆりややや如ごとく伽羅きよはらを焼やきつくまくま金銀きんぎょをつらひ

つゝまつ又また吉原雀きよはらすずめ寛文七くわんぶんしち年印本ハあまのあまの中なか瀬せふりてりゆるる春はるのつらひさてさまのまのののト

つゝまつ一ひと云い云い「ゆれの節ふしゆも大おほく丸まるなり其日そのひひまのりかきさうるががつつくくひひままらら小袖こそでかかびびららそれそれくくのの分ぶんふふままををかかひひ前まへ方かたかかららへへ」又また其用そのもちの作のしよ吉原源氏きよはらげんじ五十四君ごじゆしよきみ頼

四玉よつたま甘菊かんきくの茶ちやハ此君このきみふつきて物語ものごとりのの秋あきより冬ふゆふうふうつるつる瀬せららまま田舎のちやの金かねいいくさんあるがが与よ風かぜららくくひひつつききののささまま味あじままるるゆゆくく程ほどふふとと人ひとななんんささいいららううささううぶぶががええ浅あかかるるぬぬ心こころぎぎ一ひとかか見みええててふふ持もちとと物ものををええるるささききささらら伽羅きよはらのの一ひと柱はしらををかか浦園うらえんののににか

用捨箱 中六

けづつまる事もなり 源氏あらねば小袖なるりの時ひこれおもふきり心分はるん
「さどふ事何ぞ」 古原雀 此詞て曰ふととのふみはて曰ふを數持の異名
「さりゆりとの心あるべし」 此さういふ留人とあはれ是なり

六 荷以風呂

延宝八年京師の記か辻風呂云云との事ありそれどもめづしく思ひ「水風呂」
新く持あせき一事ありそれを荷以水風呂とのり 川念佛 元禄十一の巻ふ。ひとの
法師あを四條川原ふ年ひきく住り云云の条「三条の下家を間をかこひて」の
オウラうをかまへ一器のめんつふ登のりらひを幾し西のまうきふもそ大津繪の阿
弥陀一多をわけこれと何きよをねれが念佛のまうさか 中略 川ふをめて流れ枯木を
あめあまのたまげとまき身むされが體を通る三文の荷以水風呂との事あり此
冊子の他のらもさ不見也 淨福齋本のナヤリ場ふは事あり看板の夫もさあひあひあふ
此条の本 天 上野の花見の条ふ「何ること多こと見うちふ遺伎何ぞ行ふゆり

見えを陶く赤き方々尋ねるきたるふのるふあまーりけん大佛の後れ
ふそふ様の花盛りある其下ふ水風呂とふそその中へ花を入れて温泉水
るめうりふ湯を洗ふとふそと言つさくと垢をまゆそ居たり。あまう悪さふ足る
氣か違ひさうとの心を送伎を事ふ歌とよむ

水風呂にあらあく思ふ花されが上野のふも入てあねたれ

そののらあるあまーりと書書一ハ文の曲めて若水風呂の彼所ふ何じああふまや

慶友家集

發句狂歌集古写本
慶友の則ト養入

万治寛文頃の吟るべし

上野の風呂也 ぬををむむ風呂も我立柚木くる

とのふ句も何れが如此あり人のなり

七 椿頬燕脂

今の少女何事も何れ花のちりさそをむて頬あひひ顔へ啜めて押戯れをまる事

ものを画きても假面ゆつりても頬を赤く隈せる此余風なり

八 涙法師なる法師

人を嘲まのや一めて法師といひ又坊。發意ともいふ。凡虫といふ通ふ。鄙文虫。おん坊の類種々有り。梅さる此俗語あまより有り。散木奇歌集。連歌の部。

十月むろり月のあかりなる。灰四条の宮まわりて。女房さち小物語にて

物さび及係小徹よももそあふれのまけまばまじしころける

おん空のるもとわううーとありふけり

あふれもうやと顔ふかまる

新事曰附あひの俊頼卿へ

涙法師へ今いほ位出。時雨を相まこりほ。大空へまき出ふる事。とのまひあり

又宗長手記 大永三年の宗の催諾ふ

前句 般若寺飯乃丈を食ぶも

附句 心とみせちち 庵ん坊や文珠院

般若の智慧の事るれば文珠も食ふせちち 庵ん坊の四つを附る。下学集

「世智辨 世俗悖惜之義也」とゆればせちち 庵ん坊則今のあふん坊なり 悖者

とと食のやうなりとあて昔ものいひ 故ふかく附る事よく知らる。又我子と法師と

公是は他小対して卑下の泡なり 御隨身三上記 永正九 朔日御廐汚を産ひまの

ひ処目出度 顔をくろり 上意史 汚 笑ひ是は小法師廿九日夜まなりふ誕

生ひきをを伝出外 事小ひ」とゆの記者之上 昔男子をまうけさるららび 我

公の戯れてのまひ 事を記あり 同書 小法師誕生後 対兩種 荷

云云 三郎との小男子ゆるよ びわお見えん 故ふ法師とのり。又 猿の狂言史

我子の事をうる法師との 梅さるふ 鎌のやうふ冷し。鉄火筋のやう小瘦し。ある

やうあつぬ女を 鎌娘などより 女 鉄娘の事板 女 泪澤もるく 艶もるく 肉もる 女 又ふ

答て曰。女郎の身へ金銀をさかん傍り尤く」とあり。前ふゆ人如く當時を名自
他の混ト云故此語釋あり。名取の假字初音とゆふはうけてかく書くなり

吉原大雜書 延宝三 年刻 八橋さまあて函一ませむとふ小袖のちう一あもかきつみこ

を徳せつたりともつと殿さふかりませぶりの立姿されん傍り白糸の上もつ

りれつ結ぶ縁（續画 尽 共 茶 集 松 の 葉 一 幅 一 羽 夕 貝 利 生 草 等） へさくぐの草紙おんえ

ふれと同事なれば皆略く。又 姥櫻（梓 彫 年 号 久 元 禄 初 秋） やりまさら道具持。云とさら馬

のまき物。を鼓こり鳴物。さかん傍りならん傍り唐僧の名とあらん」とあり。花

街の事を知らざる者を嘲る詞也。夜。さら々の二ツを並出せり。又 日本莊子（元 禄 十 四 年 刻）

北歳（久 元 禄 初 秋）の夏より色小浮名と取まん傍り山谷のさものあ小舟を船くを

此草紙のま叙と字と書り作者都の錦（文 統 別 人）あつあつ者以自他を謬

らむさき狂歌ふ詠さるト養集のやうふ未見雜諧のやうもさかんくさくさ

續山の井 實文七年刻 季吟撰

兄様 我を心城さくらんが 越前 古玄

京三吟 延宝六年刻

ちまの姿 姿陽と 失 けを 仙庵

さかん傍り吊ひさへとりひ捨て 信徳

二本とも撰者の京より古玄の越前よりされ此流言寛文の頃より何處かで

つてへいへるべ。又 大尽舞（東 叡 山 小 櫓 坊 金 龍 山 小 櫓 坊）の小歌ふ

との事あり上野の花の名所なり。様の實を。さらん傍りさふより小櫓坊と人名の

やまふひたせ。金龍山の花街の通ひ路なる故さかん傍りと對あるやあらん

十三 七色吉賣

昔い庚申と信むる者よとふ多知り故めを庚申の日あり七色吉賣子成吉賣小

是り當時の人は是を七色賣とのり
 庚申秘録 申も石えたる如く七種の供物とて
 海つて祭つはるるふより。それを表しつ物ることを 世説愚衆同答 寛保二 白 廿
 年刻

る庚申の七色。甲子の七色とて名目一錢少く七色の供物を賣りたり其調へざり
 干菓子砂糖大豆せんべい梅の物と調ふ。さて供物の箱へやうへ或は高麗せんべい
 かねれ びらうあみ形をこけり。久小き箱又の文匣るとふ仕切るとて供物と入し
 箱の仕切らぬふ記と圖の如し。外は袋賤布の錢をのれ持
 ともゆりの又箱の中仕切ると大きゆして浅を入るもあり。是
 も後紙に包と仕切ると箱に入る。元禄年中までいなりふ
 賣ゆりし紙ははむやうふわりて後程なる賣也 以上愚
 衆同答



あみふら如く今の店に賣買のまわり 備膳をせざる 賣買の事あり 如く七色菓子庚申
 の供物るがどや元禄より大黒も備へ今の童へ天満宮の供する物との思ふ

もどき 五雜俎の類へ庚申 秘録の如くどきども 青面金剛の七の救を用ふる事 道家の言り更
 りり本朝やも忌は和尙の七さるの歌。古書と探ら種くゆへ 今庚申の日
 物やちて洗髪と食むさきの七庚申つらりのありと婦女のひらうに なるも七の救
 る。是と一度ゆてんとさんとするあり七所の洗髪とむむ事とを。初て洗髪とむむ
 者さる事とする誤りありんとは老のいへり。さて七色菓子といふまをさるるを

尊啓集 万治三年刻常辰撰
 七種の庚申の 七種や七味の菓子ふかのえ申 重以
 洛陽集 延享八年刻
 七色菓子とるるべし

庚申夜 一説ふ七色賣や 呼子鳥 自悦
 呼子もい様るりとの小説 下学集 務野合裁 寺ふのれ。申をゆせける利口り
 又 瓜流美の浮橋 京新在家の事とる象ふ 瓜流美の浮橋 瓜流美の浮橋

ちのれ一色運よりのあふ流れをよると思ふべし。いさよや照子の衆。料足と後
願いごまきごとをあれまき。圃のあやう。其時片時のうち百首の歌と録
あわやめのごまきまで唐名とつけてありけりまかくなり。髪れが智恵のかともふりせ
りしを唐名も忘れまき。のたまてあなう。我心是こそやとき唐名とて一を買極へ
長者殿ふ奉るま。一番ふ。さうらんと。春のよとめつくと。せのらんと。サガの事。
うごまごん。山半。かごまごん。野老の事。くらうと。海老の事。いちととて。ひと
りいり。儲。暗の夜のつれ男。ごのたまていひさるの款。小殿原との流れをゆる。ごま
まれば。長者此由。浮世袋とていふまふ此娘のよ。あは者と見えてあつ。情をかけて
つらんと十六人の下の水仕のちごまごんをことわひあつ。情をかけてつらんと。と目ええ
これ。は是よりふる款ごまか。もれ七色菓子。のゆるる事。論らるべし。のま抄。の条
今説。経傳らり。あはら。一。候のうのつれ男。大和国で。田舎よ
ひまの事。いひさる。と。悟りそのや。異同ありとを

○因ふ記雑談と見流し。多。儘谷道玄坂をのかり。軒茶屋の路。中日志の

うらるべし。右の方小宮。地小氷川。明神の社。あり。甚左。延室八度申。と。廊。る
彼青面金剛の石像。一。堂。と。の程。あも。あ。ぬ。飯。の。兩。履。ひ。と。か。浮世袋。ふ。く。で
猿。河。沟。さ。の。納。め。あ。り。と。十。年。な。ら。ま。あ。お。見。え。り。出。來。舟。京。土。産。寛。文。四。年。作。
延。宝。五。年。刻。小
「三條通大橋東。白河橋よりなる東。二申の社あり。」。あ。ん。ど。の。ひ。と。ら。り。』
あ。へ。う。き。浮。世。袋。を。う。け。色。よ。き。小。袖。ま。せ。上。燈。洗。米。粥。供。多。備。ふ。と。あ。る。小。合
考。ま。ら。ふ。あ。の。浮。世。袋。の。事。の。い。へ。と。若。彼。括。猿。も。庚。申。小。を。さ。む。ら。原。を。そ。れ。が。流。し
為。の。神。へ。移。り。欲。と。思。は。る。友。人。曰。真。言。の。壇。門。金。剛。極。柱。あり。小。掛。の。金。剛
寶。幢。と。の。物。あり。安。祥。寺。の。錦。を。り。て。火。形。と。か。さ。り。二。角。小。籠。裏。小。香。と。の。も。あ。り
浮。世。袋。其。形。よ。似。う。故。寶。幢。あ。る。を。ら。て。神。佛。お。き。る。あ。る。あ。る。と。此。説。も。よ。れ。が
金。剛。の。名。も。因。て。浮。世。袋。も。庚。申。小。納。め。が。起。原。あ。ら。ん

十四 誰袖 花袋

誰袖たがそで、白しろひ袋ふくろなり。紐ひもをつけて二つ連つひ今いま袂たもと落おしとひ物の如ごとく七なな持も持も故ゆふ古ふる画ゑの誰袖たがそでの紐ひものつるるなり。是こゝは原もと一ひと色いろよりも香かとをたそれともたぬれ誰袖たがそでぬれ一ひと宿やど乃すなは梅うめぬも」とのふ古今集の歌也名づけらるる楊枝やなぎさしとるやその名義なごころ我われぞえ昔むかしのちやく香具かうぐ賣うり持もた来き。見世みやま店たなあても賣うり分ぶんる。誰袖たがそでと白しろひ袋ふくろなり」とのふ証あかしをづくゆり其そのら四よとと記あと。老傳らうでん物語ものがたり語ことば。實まこと文ぶん四よ下しも御靈ごりやうの家いへふ「矢田やたの地ぢ落おれのおとこのかりふ」とら見世みやま棚たなるがむまに。かゝりたてくる小こる物の如ごとく。いと愛あいりくひぬけある印いん終はつ中ちゆう着ちやく。針はりぎ櫛くし。櫛くし。がうぐ。誰袖たがそでぬれ一ひとちあひの具ぐ大おほ極ごく花はなをうゑ云いふ。又また下しも養やう狂きやうお集あふ。大おほの誰袖たがそでぬるををそとて引ひこころをわいする名な小こ。天和てんわ二年にの甲子かろ承じやうより。物もの也なり印いん本ほんとふ小黒こくろなり。

かたてあるあひもぬりたが袖とひげども君も大のつらみく

同集 又また若わかき香具かうぐ屋やちあひりて及およぶの香具かうぐと云いふける。略りやく伽羅がら。たが袖。花はなの露つゆ踏ふみ



衣配 女の立置り 世袋や 衣配 友也

崑山集 慶安四

花々のつがをのうき世袋くあ 作者不知

ひの 後砌金袋
あの上の五文字
咲花のトあり

玉箱 延宝四

見まはし氣のうきよ袋や花袋 女 香屋

茶の白の花の香どあうと匂袋をさのり 後の匂の香妻とニ並べてのり
後録して後勘ふ備ふ。びつろふも浮世袋の匂ゆれを考証し便る。故に略く

○毛吹草 附合指南ふ「袋。傘弓。浮世。と食」と見えども寛永より

浮世袋をのり 傘袋。弓袋。浮世袋。
と世袋と附合し教へ也 又世話盡 美濃
三年 同指南ふ「浮世。月蝕

中着。戲女」と記す。兼應より浮世巾着との物あり。浮世巾着を桔梗

袋との物の類ありむや浮世袋との別物なるべし

十五 土手節 加賀節

昔に谷通ひとり者の歌ひにふは節とのり今傳たる踊で歌吉原雀ふ。それ

編み立もそこおあり云とのり糸の節なり。此吉原雀の歌初て作り起しき

當時二張の言高の原富の羽の唱弁を見られ。のり昔流行せしふは節こそ

よわくめとををんざされしる節とを 梅の箱の宝永
六年の生 その箱の門人の門人小林共文化

丙寅の二月もて 子か
さなり 合壁も任のふは節を弾歌ふぬふふと唱歌いなる

ての傳とも一歌 松の葉
この巻 ぬえたると谷飯りとゆきまを歌 世から
あわれ

小大同小異なればよく不載其二歌

○前日 ひの
あま 面白かつさ今日 けふ びとや物淋し。 びとつと と呼ぶやわらう。若香とひん

城招かう まの
あま 狹。 まの
あま ぼん。 あま とうき物がある。 あま 何が。 あま 一口 あま 茄子 あま 小紅 あま の仕のこをわいて



京都板の色好小圖の目これ看板江戸のなごり一あつらひ
 下つくり軒へひきく物なる故出入人の天窓とくせ下の用心飲賃札の反し台や
 あまさまめて胡粉を白く隈ざりしを
 此圖は今の雙屋の看板種々の圖を
 得るもあれと考へ足さざる多かる不載

十七 鎮銚屋の金魚

江戸兼子貞享四年金魚屋下谷池之端 あんちう屋重たあつと記又同所小

地張きせる屋 あんちう屋市野を巻つとあれが重たあつとも原の烟管屋をまじりて

向之圖 延宝八

納涼 影涼 金魚の光り鎮銚屋 調杓

延宝中より名高き金魚商人多し事此句あて知り西鶴元禄六二の巻小

上野の様云云黒門より池の端のむむ小法湊屋市を巻つとて隠れるき金魚銀
 魚を賣者あり庭小生舟七八も並べて洒水清く浮涼とこれるる潜て泳ぎり

との小事あり 西鶴の雜傳人多し
 今なき商人の住難き繁華の地とあり
 再云此至云産の目録小「金魚分狂言もあつ」との小事あり是より前元禄紀年

小刊行せし風流盛衰記小又の日に金魚と生舟小の狂言とせける是もつひ

用捨箱 中註

水ふるして」との事又あり。梅ふ金魚の狂言と彼魚水中に宛轉し踊り狂ふ
さままる事。今桑を植る者狂ひ咲くと花形のまゝとを蕊かあるとら類
也ゆらん此事發句あらはく見えたり左抄出

新續大筑波集

万治三年季吟撰
寛文七年刻

とまるとや狂言金魚秋乃水 松滴

十八 物成賞て伽羅とのみ

廿日伽羅と愛する事今小過より其故小奇なる事物と賞るも伽羅とのみ事
最おや一子か 幼あらの老人也。今の俗世事とのみ事と。伽羅をのみ世事
者と。伽羅者とのみのゆり。思ふ伽羅小左衛門。伽羅休慶らら廿日の替
間も自松中ゆらむ。さる意をて初他より名つけらる。備。伽羅とのみ廿日古く
見えたり。鳥籠物語 正保年間 著写本 一足もめくさし時代名と上とゆふと下さるの

安きをよらふ心さ人實ゆりがさき物語のあんのとらさるべき伽羅の道さや
迦魯まうさん」とゆり。伽羅の道正き道直る道とのみ程の事なり

延宝六年 露言蔵巨帳

此句 富士石 小又ゆり

國厚う千代のつやあり伽羅の春 露言

玉の春とのみさきと伽羅あかへり。國厚うとゆれ正き春とのみ意をさるる歌

貝あやひ

寛文十二年 松尾宗房撰

あやひゆる声や伽羅節うらひ初 三木

程拍子のさくのひさる節流のなやあやひ

隠葉

延宝五

立次世世の伽羅より乃春 蘭

袖ふれさとの伽羅様梅の花 かつ野

容貌の艶るは如羅様なごころが當時の女御然りの作者のれれも女なり世
 界とのふも又昔の流言世界ふ又とあるまゝとのふ意なり。又貞女白雲垢貞字三
年即本
 五の巻ふ「何甘木の定村とのふあり妻室の同家中の息女。又外ふありひのりて落して
 通ひが妻の女房恨むる事は此後妾を本宅おられてのきりて居せともあるや
 恨とて下つゝの男女のひかひなる奥の心やりをかやと心ゆる人と物の種
 こそんろりなれ實梅檀の若生かなと感する。是より本妻と伽羅の序ふと
 異名一妾の名と狗燈籠と欺く引ひられて先り阿重との公事なるべし」あふ
 狗燈籠の語釋をひく本妻の異名は語釋あきと見らふ昔昔人か伽羅の序
 とのひて操正く心直るる事とぞん「あふ」。古き草紙に伽羅の橋伽羅の下駄
 ろの事あり是も唯賞ふるまふ也。俗語ふいふ。結構な橋。結構な下駄。
 伽羅落。伽羅牛房も昔よりの名なるべし今香ひるき物を伽羅とのとる欲

十九 師走坊主

近松門た巻の作の夕夕の淨溜瀧の傾漣阿波の嘯なげと題も。吉田屋乃阪。
 伊を流の洞いそふ「紙衣さきりぞあらのく引くを破れる松めを跡ふあふと坊主
 ちんちん浪人」とあり姿あつてく便りある者ぞさして師走坊主。あきを
 浪人との諺の昔あり「故ふかくつげて書きさるあり金あり僧の物りらふ事
 なるをいふも歳をわらさる事もあるまゝなり

落花集 寛文十一年刻以仙撰

佛名 佛名を唱ふの師走坊主をか 勝正
 此諺の實の僧の事あふあ記する。と日坊主なるがらふと違り。今の淨溜
 瀧本より師走坊主との事略てり

用捨箱中之巻 平



用捨箱 中 庄



五 平

1415